

家事調停委員になって

貝山久子

昭和59年4月に浦和家庭裁判所の家事調停委員に任命された。調停委員を希望した理由は、35年間も浦和に住みながら日も身体も東京にばかり向けてすごしてきたので、何か地元のために役立ちたいという気持の他に、今までと全く異った分野の勉強が出来、定年70才というのが魅力的だったからである。私が調停委員になれたのは、女高師時代のクラスメートの御夫君で、何代か前の浦和家庭裁判所長であられた小河八十次氏の御推輓によるもので、その他4回生の前沢智恵子さんにもお世話になった。

調停委員会は、裁判官と男女の調停委員の3人で組織されて調停に当るが、事案の中何といても多いのは夫婦間の問題で、新米の私はベテラン委員と組んで夫婦間調整に当ることが多い。

我が国の離婚件数は、昭和38年を底として増加の一途を辿っており、59年にはやや減少したものの年間約18万組の夫婦が離婚に追いこまれている。その中の91%は協議離婚で、調停離婚は8%、その他1%となっている。また家庭裁判所に申立てられる離婚調停件数の中、75%は妻からの申立てによるものである。離婚する18万組の夫婦の中69%には未成年の子供が居り、その数は今や22万人をこえている。調停離婚の場合は、子供の親権や養育費の支払いについてもとりきめられ、記録されて判決と同様の効力をもつが、協議離婚の場合はそれらのとりきめが明確に行われない場合も多いようである。子供の70%は妻に引きとられており、今や母子家庭の半数以上が離婚によるものであるという。これら母子家庭の中で、経済的に

安定している例は極めて少い。別れた夫が子供にキッチンと養育費を支払っているのは僅か20%にすぎないという。これには面接権にかゝる問題や、夫の再婚など理由はいろいろあると思われるが、何といても責任観念の欠如は責められて然るべきであろう。母子家庭の平均収入は、一般世帯の約40%といわれ、その結果児童扶養手当の支給額（10年間で約10倍）や生活保護世帯はうなぎ昇りに増加し、財政面からも無視できない状態になっている。

厚生省は昭和59年6月、増加し続ける離婚がひきおこすさまざまな社会問題、とくに離婚した夫婦の子供の福祉について、行政としての対応策を探るために8人の委員から成る、“離婚制度等研究会”を発足させたが、この報告書が昨年暮にまとめられた。このことは新聞もかなりのスペースを割いて報道したので御記憶の方も少くないと思う。その骨子とするところは、協議離婚制度の改善をめざすために、結婚生活の崩壊を防ぐための総合的な相談機関の整備、離婚に際しての子供の権利の確保、養育費支払いに関する規定の整備と履行の確保についての具体策を提言したものである。この提言が果してどれ程の効果を挙げ得るか——については今後の行政と何よりも先ず当事者の自覚に俟たねばならない。最近では子供の親権を拒否し、相互に押しつけあう事例さえあると聞くが、私の乏しい経験の中ではそのような例はなく、大方が母親に引きとられたことがせめてもの救いである。

(地図情報センター)

英国紅茶事情

吉田知子

イギリス人のお茶好きは非常に有名なことと
思います。イギリスのティータイムについてレポー

トしたく存じます。

アーリー・モーニング・ティーという習慣をす

べての人が持っているわけではないと思いますが、朝目覚めるとすぐに、キッチンでお茶の支度をし、お盆をかちかちいわせて寝室まで運び、ゆっくりお茶を飲む習慣というものがあります。もっともこれは朝忙しい人にはあてはまらないのですが、私の下宿先の御夫婦など、御主人はすでに退職をされ奥様と二人、趣味で飼っている羊や牛の世話をしながら、絵をかいったり旅行を楽しんだり、その様な余裕のある静かな生活を送っている人々や、あるいはホテルなどでアーリー・モーニング・ティーのサービス掲示などを目にしますと、朝のお茶というのは、なかなかポピュラーな習慣なのだろうな、と思います。

お茶の話から少しそれるのですが、イギリスの朝食…すなわちイングリッシュ・ブレックファストというのは、大陸の国々とは異なり、非常にしっかりとした内容の朝食のことをさします。フランスなどでは、コーヒーにパンとバターとジャムだけですませてしまうのが普通なのだそうですが、イギリス人は朝食を非常に重視するので、ベーコンアンドエッグや、キッパーというにしのくん製や、ソーセージなどが登場してくるわけです。

実際の話、こういったものを朝からしっかりたべている人はそう多くないように思われますが、旅行などで、民宿やホテルなどに泊まるとなると、話は別のようにです。さきほど述べましたメインディッシュの前にコーンフレークスなどのシリアルと、三〜四枚の薄いトースト、バター、ママレード、そして紅茶がでてくるわけにあります。そのボリュームたるやすばらしいもので、お昼ごはんがいらなくらいです。

トーストにママレードに紅茶、の組合せは、御飯にお味噌汁におしんこ、といったところにあたるのでしょうか。もっとも、コーヒーも紅茶におとらずよく飲まれており、午前のティータイムにも、コーヒーをいれて飲んでいる人が多いくらいだと思われまます。

街で「カフェ」の看板をにかけているところでは、簡単な食事（サンドイッチやパイなど）やお菓子とともに、コーヒーや紅茶を楽しめます。コーヒーが120円程、紅茶が100円程で、日本の喫茶店とはずいぶんと値段の開きがありますが、その味

や、お店の中の清潔感などから比べてみると、一概にどちらがよいともいえない気がするのです。

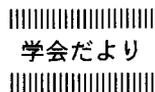
よほどこだわることのない限り、（一流ホテルなどなら話は別なのでしょうが）かなり料理に手のかかっているようなレストランやカフェなどでも、紅茶はたいてい、ティーバッグでてくるのです。これは一般家庭でも同様です。日本にいた頃、リーフティーばかり飲んでいて、ティーバッグ入りの紅茶を飲むと紙の味がするような固定観念にとらわれていた私は、今でも少し抵抗を感じてしまうのです。

しかしここで考えてみますと、これだけ大量のティーバッグが使用されているならば、お茶は古いものではありませんし、こちらのティーバッグは、日本製のように糸がついているわけではなく、ぽんぽんと二つ三つポットの中に投げこんで、お湯を注ぐわけですが、そのポットを洗うときに、茶がらを捨てる面倒が省けるためだけに考えだされたというような、実に愛きょうのない、ただのお茶の紙づつみなのでありますから、こちらの普通のリーフティーと味はかわらない、と思うわけでありまます。

今まで味わったティータイムのうち印象的だったものを思い出しますと、下宿先の奥様がいつもふるまってくくださるケーキと一緒にいただく、むせかえるような夏の午後のお茶…天気の良い限り午後のお茶はお庭でいただくのですが、牧草の緑の上を吹きわたってくる風と、近くのすいかづらの甘い香りとにつつまれた、気もちのよいけだるさのある午後…、あるいは、車でウェールズ地方へ行った帰りに寄った小さな街の民宿の小ぎれいな部屋に、荷物を持ってひとりでもかどか入りこんでいくと、お盆にきれいなカップとミルクがたっぷりはいったポットが用意されていて、ひとり旅の疲れがいやすれた時のことなどつぎつぎと思ひ浮かびまます。

夜寝床につく前に、ちょっとのどの渴きを感じたら…やはり紅茶を入れることが多くあります。ですがこれは紅茶党になった私だけの習慣かもしれません。

（ 32 回牛）



学会だより

学会活動報告

1 60年度総会、講演会等

第4回目のお茶の水地理学会総会は、4月20日(土)午後2時半から一般教育棟2号館102室にて開催された。出席者は40名。恒例により議長(武田むつみ氏)を選出、浅海重夫総務の挨拶のあと、59年度事業および同決算が報告され承認された。次いで協議事項に入り、会員状況と新入会員名簿の紹介、60年度事業計画、同予算案についての説明があり、いずれも承認された。なお、1984年10月25日逝去された赤木健先生の冥福を祈り全員黙禱を捧げた。

総会に続き午後3時より講演会が開催され、大学院博士課程在学の田中恭子氏(修士52年入学)の「東京西郊のモータリゼーションの発達と土地所有」、井内昇教授の「都市の現実—ニュータウンの盛衰を例として—」の2つの講演が行われ、午後5時過ぎ散会した。午後5時半からは、茗荷谷駅近くのレストラン「土味」で懇親会が開かれ、36名が参加して盛会であった。

2 談話会

1985年11月30日(土)に通算第54回談話会が行われ、長崎純心女子短大の滝野実氏(元教務補佐員)の「古典にみる火山活動」と題する講演があった。引き続いて、教室でささやかなビアパーティーが催され、和やかな雰囲気の中で、「地理学を職場・仕事にどう生かしてきたか」というテーマのパネルディスカッションが行われた。出席の話題提供者は原裕子(都立石神井ろう学校教諭)氏であった。出席者25名。

3 見学会

1985年4月6日(土)に都留文化大学教授の和田明子氏(女高師卒業生)の案内により甲府盆地の巡検が行わ

れた。参加者11名。一宮農協をたずね果樹栽培と農家経営について説明を受けたあと、2班に分かれ農家の聞きとり調査を行った。

なお、1985年8月下旬に予定されていた房総巡検は、参加希望者が少なかったため、中止となった。

4 ニューズンター発行

No.7 1985年6月5日(7ページ)

No.8 1985年10月25日(7ページ)

ニューズレター8号では、54回談話会でのパネルディスカッションに先がけて、「現在の仕事と地理とのかかわり」をテーマにした、卒業生会員からの投稿記事が6篇紹介された。

5 その他

a. 昭和61年度総会、講演会、懇親会は、5月10日(土)に開催の予定である。

b. 役員(昭和60年度)

総務 浅海重夫

企画 式正英, 井内昇, 阪口陽子, 瀬戸玲子, 東山セツ子, 金子晶子, 向後紀代美, 滝沢由美子
編集 浅海重夫, 井内昇, 栗原尚子, 佐藤由子, 鈴木陽子, 田中恭子, 木全令子, 石川顕子

会計 三上岳彦, 渡辺真紀子, 厚井和子, 中島直子
庶務 式正英, 内藤博夫, 渡辺真紀子, 見山久子, 武田むつみ, 河井みどり, 室伏朝子

c. 会員数(1986年2月28日現在)

教官会員(卒業生を除く)5名, 学部卒業生会員327名(卒業生467名のうち), 大学院・専攻科修了会員11名(終了者22名のうち), 学生会員79名, 特別会員20名(会費免除会員6名をふくむ)。会員総数423名。

会員消息

61年度卒業生は18名で、このうち本学大学院進学予定者は、石川教子、鈴木純子、福島依子、葉倩偉の計4名である。この他の卒業生の進路は次の通りで、この中で教職関係には2名が内定した。阿久津朱未(桐蔭学園)、宇井真理子(アメリカン・エクスプレス)、斎田靖子(口新海上火災)、酒本香(日本交通公社)、高橋三佳(シティバンク)、時村童子(長銀経営研究所)、西岡岡代

(日立中部ソフトウェア)、三浦裕美(石原企画)、三好恵理(就職希望せず)、村山知寿子(野村コンピュータシステム)、森恵子(三菱総合研究所)、安岡節子(立教英国学院[イギリス西サセックス県])、山口恵理子(構造計画研究所)、横道光(就職希望せず)。一方、修了終了者は、荒井由美、小笠原洋子、浜うららの3名で、荒井由美は、61年4月から開校される成城学園フランス校の